

## 念のための検査のつもりが

## 不安と決断②

## 難病

ウロコ茶のような血尿が出た仙台市の唐沢洋子さん(50)は仮名。07年6月、仙台内科総合クリニックで、「IGA腎症かもしれない」と言われ、血液検査を受けた。3日後、検査結果を聞きに行った。

免疫グロブリンのIGAの値が高かった。「IGA腎症だど、いずれ透析が必要になる可能性あります」と鎌田和彦院長は説明した。ただし、確定診断には、入院して腎臓の組織の一部を採取して調べる「腎生検」をする必要があるという。

当時、長男は専門学校生、次男は大学受験を控えた高校3年生だった。「血尿も止まったし、ほかに自覚症状はないが大體は……。仕事や子どもたちのことを考えると、決心できなかった。」

数年前から尿潜血は陽性だったが、総合病院で夫と夫だと言われていたので、「きつと違っただろ」という思いもあった。

血圧が高めなので、降圧剤をもらいに毎週クリニックに通ったが、返事をしないままだった。けれど、勤務先の友人に相談すると、「ちゃんと受けておいた方がいいよ」と言われて、思い直した。

「夏休みがとれる時期なら」と鎌田院長に病院の紹介を頼んだ。ただ、このときも「念のため」という気持ちだった。7月中旬、仙台社会保険病院を訪ねた。生検をしないと確定できないが、慢性腎炎で、IGA腎症の可能性が高い、と診断された。さらに、「少しずつ進行していて、このままだともう数年後は腎不全になって、透析ですよ」と木村明彦(あきひこ)院長に言われた。

唐沢さんは言葉を失った。「もう迷ってられない」。その場で8月1日に入院することを決めて帰った。後日、勤務先に提出するために診断書をもらいに行った。しかし、だれの診察を受けたかも覚えていないほど動転していたことに気づいた。入院して3日に腎生検を受けた。その5日後、やはりIGA腎症だったと、病院のベッドで木村院長から告げられた。「詳しい説明は明日します」。IGA腎症に対して仙台社会保険病院で行っている治療に関する新聞や雑誌の記事のコピーを渡された。「根柢を旨とした治療法」と書かれていたが、「アングターホットで調べたときは、治療はいづれも書かれていたはず」と思った。その夜は不安で眠れなかった。



薬を飲んだこととを袋に記録した＝仙台市